

「聴色の氷とけぬかで見ゆるを」考

はじめに

森田 直美

源氏物語 総角巻において、薫の最愛の人、宇治八宮の大君は命果てる。そして大君の死後、七日ごとの法要を取り仕切りながらも、親族でも夫でもない故に喪服を着ることすらできない薫の想いは、悲嘆と虚無をない交ぜにして、以下のように語られる。

はかなくて日ごろは過ぎゆく。七日七日のことども、いと尊くせさせたまひつつ、おろかならず孝じたまへど、限りあれば、御衣の色の交らぬを、かの御方の心寄せわきたりし人々の、いと黒く着かへたるをほの見たまふを

くれなるに落つる涙もかひなきはかたみの色をそめぬなりけり
聴色の氷とけぬかで見ゆるを、いとど濡らしそへつつながめたまふさま、いとなまめかしうきよげなり。

さて本稿で注目したいのは、傍線を付した、薫の哀傷歌の直後に見える「聴色の氷とけぬかで見ゆるを」である。「氷とけぬか」と推量として語られ、写実とも比喻とも取れる故に解釈が難しく、古注以来、幾通りかの説が呈されてきた箇所であり、近現代注に至っても尚、個々の解釈に揺れが見られる。そこで、「氷とけぬか」という表現のもつ文学的な意味を再確認しつつ、この哀傷場面における効果を踏まえてその解釈を見定め、直前の薫による独詠歌をも含めた、哀傷場面としての表現的特色について、今一度考え直してみたい。

三つの解釈

さて、当該箇所の解釈は、古注以来大きく三通りに分かれる。その第一が、河海抄による以下の説である。

こほりとけぬとは、涙にぬれたるよしにや。袖のつらゝなど云也。^①

河海抄のいう「袖のつらゝ」とは、例えば新古今和歌集六三三番、

まくらにも袖にも涙つららみてむすばぬ夢を問ふあらしかな

(新古今和歌集六三三 藤原良経)

など、鎌倉初期あたりから見始める表現を指している。「涙のつらら」という表現自体は、平安時代には例が見えないが、これが冬に流す涙は凍るといふ、いわゆる「凍れる涙」を言い換えたものであることは言うまでもない。この河海抄説に異議を唱え、第二の解釈を呈したのは花鳥余情であった。

くれなるのうちのきぬは氷のやうにみゆる也。河海に涙の氷にいひなし侍る、しかるへからさるにや。ぬらしそへたるははしめて涙の事をいへり。氷とけぬかとみゆるは、打衣の色つやをいふと心得べし。^②

河海抄説を強く否定し、「氷とけぬか」とは打衣の艶を指すのだとした花鳥余情説は、孟津抄、一葉抄にも支持される。

そして、前の二説に対して湖月抄は第三の解釈を呈す。すなわち、当該箇所「氷とけぬか」とする本があることを指摘し、こちらを採用して

とけぬるを、とけぬかといふ本あり、ぬる尤可然。とけぬるは、氷の
けてぬれたる心なるべし。さればぬらしそへつつといへり。ま

と注したのである。

この三つの解釈のいずれを是とするかという点については、前述の通り、
近現代注に至っても一定していない。主だったものを挙げれば、新日本古典
文学大系や新編日本古典文学全集は河海抄説を、玉上琢彌『源氏物語評釈』、
新潮日本古典集成、(旧) 日本古典文学全集は花鳥余情説を、(旧) 日本古典
文学大系は湖月抄説を採っている。

当該箇所について、諸注の解釈が分かれるのは、写本間における異同の影
響が大きい。『源氏物語大成』および、『源氏物語別本集成』によれば、当該
箇所は、冒頭の引用と同じく「聴色の氷とけぬか」とする本が多いものの、
既に述べたとおり、「氷とけぬる」とする本を湖月抄は採っており、また別
本には「聴色のつやなと氷とけぬか」とするものもあり、花鳥余情は、これ
を採って解釈しているのである。

涙の水

本文の異同から生じた三通りの解釈の、いずれが妥当であるのかという問
題は、やはり場面に付与する表現的效果から判断せねばならないだろう。

まず、花鳥余情説についてであるが、装束の光沢を表現する際に、それ自
体で「氷のように輝いている」と表現した例は、源氏物語中にも、また前後
の作品にも確認できない。更にこの場面において、装束が艶やかに輝くさま
に言及せねばならない必然性が見出せない。「聴色の艶など」と、「氷とけぬ
か」に説明を付したかのような描写が、後人の加筆によるものだと断言する
術はないが、以上のような点から、この説を積極的にはし得ない。

また湖月抄説は、「いとど濡らしそへつつ」と続く一文を、「氷が溶けたの
かと思うほどに濡れた袖を、更に濡らして」と読み解くことができ、そうし
た意味では説得力がある。しかし、当該箇所を「氷とけぬるか」とする本が
僅かであることを考えると、やはり決定力に欠ける。更に、袖の涙を「氷が
溶けたような」と形容した例もまた、他例を見出すことができないのである。

花鳥余情説、湖月抄説の問題点を挙げた上で結論を言えば、当該箇所の読
みは、やはり河海抄説が妥当であろう。当該場面は、厳寒の宇治の地で、最
愛の人を亡くした薫が、初めて独詠歌を詠む場面である。ここに平安初期か
ら積み上げられてきた「涙の氷」のイメージが投影されたと見るのが、最も
納得がゆく。ここで今一度、平安前期から『源氏物語』に至るまでの「涙の
氷」表現を辿り返してみよう。

冬に流す涙は凍るという発想は、古今和歌集に名高い二条後の詠、

二条のきさきの春のはじめの御うた

雪のうちに春はきにけり鶯のこほれる涙いまやとくらむ

(古今集 四)

に端を発する。春の歌であるが、歌意としては「冬の寒さに凍っていた鶯の
涙も、春となった今こそ溶け始めたことだろう」となる。古今集には他に、
年をへてきえぬおもひは有りながら夜の袂は猶こほりけり

(古今集 五九六 紀友則)

と、悲恋に流した「涙の氷」の例もある。また、古今集時代の私家集、歌合
の例を見渡せば、

しら雪を分けてわかるるかたみには袖に涙のこほるなりけり

(寛平御時后宮歌合 一五二)

冬の夜の涙にこほる我が袖の心とけずもみえし君かな(兼輔集 八〇)

など、恋に関わる使用が圧倒的に多い。更に後撰集以降の勅撰集では、

ふりとげぬ君がゆきげのしづくゆゑ袂にとけぬ氷しにけり

(後撰集 六七六 清正が母) ま

君こふる涙のこほる冬の夜は心とけたるいやはねらるる

(拾遺集 七二七 詠み人知らず)

など、叶わぬ恋に、または別れに流した涙が、寒さによって氷結するという
表現は常套的な詠みぶりとして定着している。

また散文例としては、宇津保物語の描写を挙げておきたい。俊蔭巻におい
て、俊蔭女と、太政大臣の寵児である兼雅は、かりそめの契をかわす。しか
し、兼雅一家の護衛が嚴重となったことにより、二人は逢う事ができぬまま、
日々が過ぎてゆく。二人はそれぞれに嘆きつつ、季節は廻って冬となる。

かの京極にも、風の荒く、霜、雪の降り積むままに、長き夜によるづ
のことを思ひ明かして、袖の凍れるを見て、

わが袖の解けぬ氷を見るときぞ結びし人もありと知らるる

これは訪れない兼雅を想い、寒き夜に夜通し泣き明かした俊蔭女が、自
分の袖に涙が凍っているのを見て歌を詠んだ場面である。和歌だけではなく、
地の文にも「涙の氷」が描写されている点、源氏物語の前例として注目すべ
きであろう。

永遠に解けぬ氷

確認してきたように、「氷の涙」「凍れる袖」とは、平安期はかなり早い段
階から現れ、冬の涙の表現として着実に浸透していた。よって総角巻におけ
る「氷とけぬか」という表現は、それだけで享受者に、先行する種々の和歌、
散文のイメージを想起させたはずである。また更に次の様な例を見ると、
当該場面に寄せられた「とけぬ氷」の悲劇性が、より鮮明に見えてくる。

悲恋に流した「涙の氷」という表現から派生し、恋の成就によって涙が溶
解するといった表現が、後撰集時代前後から確認できる。一例として、和泉
式部集の例を挙げる。

十二月、つとめての歌とて男のよませし

うちはへて涙に数きし片敷の袖の氷ぞ今日はとけたる

(四四五番・続集三六一番)

詞書にあるように、当歌は後朝の歌を代作してくれるよう依頼され、和泉
式部が詠んだものである。すなわち「涙の氷」は、相手との交渉が続く
内は、溶解する可能性があるのだ。しかし、薫の場合は違う。既に思い人た
る大君を亡くしている薫の恋情は、この先永遠に報われることはない。よっ
て薫の袖に凝結したかと思える「涙の氷」は、決して溶ける日は来ない。片
恋の相手が亡き人であるゆえ、「涙の氷」が孕む絶望の色合いは、従来の悲

恋歌に比して格段に深いのである。

「紅の涙」と「涙の氷」

最後に、「涙の氷」と、直前の独詠歌に見える「紅の涙」から当該場面の表現的性質を考察し、結びに代えたい。

悲嘆の極みを表す「紅の涙」は、源氏物語以前の和歌においては、主として悲恋歌に使用される歌語であり、哀傷歌での使用は少数派であったことは伊原昭氏による指摘がある^⑧。管見によれば「氷の涙」もまた、二条后歌の様な若干の例外を除けば、主として悲恋の場に用いられ、哀傷の場で用いられた例は、源氏物語以前には確認できない。確かに薫にとつて、大君の死は恋の消滅に直結し、そうした意味で両語の投影も、従来の悲恋の場での使用から、それほど離れたものではないのだと言える。しかし、逆照射して考えれば、この事実から読み取れるのはむしろ、当該場面に表現された薫の心情が、大君の死そのものを悼むことよりも、彼女との恋の喪失への、無念や虚無に傾いているということではないだろうか。

当該場面の後には、「おくれじと空行く月を慕うかな終に住むべきこの世ならねば」や、「恋わびて死ぬるくすりのゆかしきに雪の山にや後を消なまし」といった哀傷歌が薫によつて詠まれる。しかし、結局薫は大君への想いに殉ずることも、この機に本願であったはずの出家を遂げることもなく、その心は中君、そして浮舟へと移つてゆく。そうした悲恋の継続は既に、哀傷よりも猶強く、恋の無念へと傾く、当該場面に示唆されている。愛する人を亡くした時、その死を受け止め、哀悼の意を尽くすことが、あるいはその人への想いに区切りをつける第一歩となる。しかし、薫にはそれができなかった。墨染の喪服を着ることができない故に「紅の涙」すら「かひなし」と詠い、永遠に解けることのない「涙の氷」を袖に残したままの薫の恋が、ここ

で終着に至るはずはないのである。

※ 本稿における源氏物語、宇津保物語の引用は、新編日本古典文学全集に、和歌はすべて新編国歌大観 ed.rom による（ただし、和歌は私にて一部表記を改めた）。

注

注①

山本利達校訂、玉上琢彌編『紫明抄 河海抄』角川書店1968年。

注②

伊井春樹編『源氏物語古注集成 第一巻』桜楓社1978年。ただし、句読点は筆者が附した。

注③

『増注源氏物語湖月抄下巻』弘文社1927年。

注④

『源氏物語大成巻三校異篇』（中央公論社1956年）によれば、河内本系統大島本が「氷とけぬると」、陽明家本・保坂本・平瀬本が「ゆるしいろのつやなど」、また『源氏物語別本集成』（おうふう2001年）によれば、蓬左本が「氷とけぬるか」と、陽明文庫本が「ゆるしいろのつやなど」とする。

注⑤

当歌は兼輔集（八三番）にも見えるが、ここでは清正母ではなく兼輔の歌とされている。

注⑥

本文中に挙げた歌の他に、後撰集に二首（四六三、四八一）、拾遺集に二首（二三〇、二三三）、後拾遺集に一首（七八二）、また私家集においても、元輔集（二三三）、保憲女集（二〇二）、十一世紀以降も、定頼集（二五二）、経信集（二二三、二四一）などに類例が見られる。

注⑦

他例としては、元輔集（二三三）「よそにても思ひおこせば冬の夜の袂にこほる涙とくやと」などが挙げられる。

注⑧

伊原昭氏「くれなゐのなみだ―『宇津保物語』における―」『平安文学の色相―特に散文作品を中心として―』笠間書院1967年所収